共同体作りへの取り組み

岩倉　宣子

二十一世紀の始まりまで余すところ二年となりました。アブドル・バハによって「光の世紀」と呼ばれた今世紀の最後のこの四年間について万国正義院は、レズワン153年のメッセージで「世界情勢が激烈に変化する」時期、「バハオラの啓示の衝撃によって引き起こされた変化の二つのプロセスが迅速に働き、さらに勢いを増す」時期、「我々の住むこの星の表面を作り替える諸勢力が、頂点に達する」時、この地球の歴史で「最も危機的な時期の一つ」と説明されています。

私たちバハイは、このような重要な時期に四年計画に取りかかりました。私たち皆が認識しているように、四年計画の主要な目標は「集団加入のプロセスを大きく推進させる」というものです。この目標達成のためには、バハオラの秩序を支える三つの構成要素がこの可能性を確信しなければならないと万国正義院は述べておられます。

その三つの構成要素とは、個々のバハイ、機構、共同体です。

個々のバハイとは私たち一人一人を指し、それがバハオラの世界秩序を支える構成要素という意味は容易に理解できます。また、バハイの機構とは万国正義院、全国、および地方精神行政会など信教の行政に携わる機関、国際布教センター、大陸顧問の機関、ホゴゴラの機構、年次大会、19日毎のフィーストなどを指すということ、更にそれが構成要素ということもイメージすることができると思います。しかし共同体というのは具体化しがたいという声が多く聞かれます。

今年アジアの大陸顧問団を代表して日本の年次大会に参加されたリーリーさんが、ボートとそれに乗り込んで前進しようと漕いでいる皆の絵を描いて、このボートに当たるのが共同体という説明をしていました。あの喩えは、共同体をイメージするうえで助けになったのではないかと思います。このボートがおとぎ話「かちかち山」に出てくるタヌキが乗ったあの泥のボートでないように、しっかりしたものにしなければなりません。

四年計画最初の年のレズワンのメッセージで万国正義院は共同体建設について、「どこにおいてもバハイたちは共同体建設のプロセスに入ったばかり」と述べておられます。

たとえば私はよくミャンマーのバハイ共同体を訪問しますが、この共同体は100年以上の歴史を持っています。村の全所帯がバハイというところがあり、アブドル・バハによって「アブドル・バハ村」と命名されています。しかしこれほど長い歴史を持ち、バハイの人数も揃っているミャンマーでさえ、「バハイ共同体とは何か、どのようにそれを建設するのか？自分は何ができるのか」などについては今、取り組みを始めたところです。

今回日本のバハイ学術研究会はこれを大会テーマとして取り上げ、友らに働きかけていますが、これはまことに時機を得たものと思います。

活気に満ちた共同体を作るためにはさまざまな活動が不可欠ですが、レズワン・メッセージ153には共同体作りの鍵となる概念がいくつか述べられています。

共同体とは、多様性に富む人々が互いに作用しながら和合を達成し、維持しつつ、精神的、

社会的進歩を追求する文明の総合体である。またその構成メンバーは「大人、若者、子供」、つまりすべての人です。ということは考え方、年齢、学歴、職業、習慣、好みなどすべての面で様々に違う人々の集りです。その人々が共通の課題としての「人類の福利」に向けて集団として活動するのです。

その共同体を繁栄させるためには、行動パターンを高めなければなりません。行動パターンとは精神行政会の機能と共同体の個々のメンバーの美徳の表現であり、それは共同体内の和合と友愛に示され、また共同体の活動と成長の勢いに示されます。「和合」と「友愛」がその鍵で、その和合を培う手段としてバハオラが人類に示されたものが協議です。

> 「最高の友情と、完全な友愛の精神をもって共に協議せよ。そして汝らの生涯の貴重な日々を、いにしえより続く主権者なる彼の大業の促進に捧げよ。」
>
> バハオラ

> 「意見の違いや考え方の多様性が、あなたをあなたの仲間たちから引き離すことがないように、またそれが争いや憎しみや不和の原因となるのを許してはならない。むしろ熱心に真実を求め、すべての人々をあなたの友達とするようにせよ。」
>
> アブドル・バハ

共同体の成り立ちの基礎は和合で、和合がなければ頑丈で大きなボートは作れず、すぐに沈没することになるでしょう。共同体は単なるメンバーの寄せ集めではありません。共同体の持つ個性は構成メンバーの一人一人が持つものや、行政機構のものとは別のものです。このような多様な人々の集まりで全員が一体となるように指揮をとる権威のあるリーダーが必要です。ここでいうリーダーは、財力や体力、知力にものを言わせて、独断的にすべてを効率よく取り仕切っていくと言う、従来のタイプのリーダーではなく、たとえば実力、人格の力、模範の力、また和合の力を発揮し、関係者全員を巻き込んだ協議を通して物事を進めていくことのできる権威を指します。この権威あるリーダーの座にあるべきものは、バハオラの示された世界秩序の中で示されているように、精神行政会です。

今年、日本には40の地方精神行政会が成立しておりますが、この数は20年前に比べ、むしろ減っているのです。新しい入信者を受け入れるしっかりした共同体が無かったことが地方精神行政会の数減少の原因の一つですが、一方しっかりした共同体作りにはバハイの数が必要で、この二つは互いに作用しあうのです。ですから共同体作りを考えるなら、しっかり機能する行政会が必要です。

地方精神行政会は新たな段階に進み、人々のための神聖な媒体となり、布教活動を計画し、人材を開発し、愛情を持って多くの人々を指導するという責任を果たさなければなりません。「彼ら（行政会メンバー）は大業の業務を賢明に、かつ効率よく運営するだけでなく、... 暖かさや真心、互いに助け合う気持ちを強め、深めていくべきでる。」、...「大業の行政機構は、信教の中に潜むダイナミックな力を引き出し、... 人間の生活と行動を形づくる舵取りをすると同時に、共同体の構成員の間で考えを交換し、活動を調整する責任がある。」とショーギ・エフェンディは説明しておられます。

その行政会がいかに効果的に共同体メンバーとかかわっているかを見ることによって、精神

行政会がどれだけその役割を果たしているか、つまりどれだけ成熟しているかを測ることができます。また、共同体の精神的、社会的状況は健全であるか、共同体の発展の力はどれだけ大きいかなどの要素を検討することによってもその成熟度が測れます。行政会の役目については、守護者や万国正義院によってたくさんの指導書が出されていて、この課題だけで何日間かの勉強会を必要とするほどです。幸い日本の全国精神行政会は、来月から九州を皮切りに「地方精神行政会についての研修」を実施することを企画されていますので、皆さんの地区で行われる際には、ぜひ参加してください。

日本の状態を考える時、1920 年にアブドル・バハが書かれた書簡の次のような引用文がヒントになるのではないでしょうか。

> 「日本は土壌に手がつけられていない農園のようである。このような土壌には膨大な能力がある。... 汝はその土地を開拓しなければならない。汝はそこからとげや雑草を取り除かなければならない。. . . 神の知識の雨で灌概しなければならない ...」
>
> (「僚原の火—日本」より)

私は、初めのうちはとげや雑章を取り除く作業にかなりの時間と労力を費やすことになると思うのですが、では「雑草をとる」作業にはどのような活動があるでしょう。最も効果的なものはお祈りと思います。祈りについて語れば何時間も必要で、これ自体が大きな研究課題ともなるものですが、とにかく、バハイたちが一堂に集まって心から祈ることは友らの心を一つに結ぶうえで極めて有効です。そしてその祈りの影響は大きなうねりとなって、この乾いた土壌を潤すでしょう。

レズワン153 年のメッセージには「共同体全体の精神生活を高めるために不可欠なことは、共同体が一体となって神を崇拝することで、バハイはこのために信者の家やバハイ・センターなどの場所に集まって祈ることを定期的に行うことである。」とあります。

しかしながら、このような祈りの会を進めるうえでも、一人一人のバハイが強化されていなければ活動が成り立ちません。個々のバハイの強化のためにも私たちはこの四年計画で、人材開発のための断固とした活動を促進しなければなりません。つまり、これまでにまったくなかった規模で訓練機関のネット・ワークを発展させることによって訓練されたバハイの数を増やすシステムを確立させることです。

日本では、全国精神行政会のもとにバハイ人材開発インスティテユート（BID）が設置されており、すでに全国に 8 つの地区に世話係を任命してこの活動を軌道に載せつつあります。

私たちは四年計画の中で、人材開発を推進するインスティテユートの活動を世界中で活発にするため何らかの形で貢献するよう求められています。参加の形は、研修コースに参加する、コースをお世話する、資料を提供する、資金を提供する、時間を提供する、場所を提供するなどいろいろあり、自分の状況にあわせて選択すれば良いのです。ここで、自分はどのような形で貢献しているかをふりかえり、もっとできることはないかを考えて見ることも必要でしょう。

私たちの取りかかっている聖なる四年計画の達成まで、明日から二年と少しです。万国正義院は私たち全員がこの極めて重要な時期の業務をこなすために立ち上がるよう期待しておら

れます。この時期の激動によってバハイ共同体は急激な変化に対処できるよう準備され、世界中の皆が模範と援助を求める場とならなければならないのです。

この大会では、この後、筑紫野やインドのある村での実例などをもとに更に具体的な話を進めるプログラムになっています。その結果、大会が終わって私たちがそれぞれの共同体に帰っていく時には、各自が自分の共同体を建設するために何らかの具体的な行動をする決意が固められていなければなりません。それにより日本のバハイ学術研究会は、他の多くの学術集団に見られる欠陥—「言葉に始まり言葉に終わる、あるいは「重箱の隅をつつくような議論」に無駄な時間とお金を費やす—から解放された新しい学術集団であるということを証明できるでしょうし、そのことは万国正義院がバハイ学術研究会に望まれる姿勢であります。

四年計画の中間点に行われているこの学会が、バハオラの世界秩序が目指している共同体を作る活動にとって起爆剤となることを祈願してやみません。